Anthropology of Japan in Japan Fall Meeting 2018
Q Building, Nanzan University, Nagoya

Student Forum: Abstracts

Theme: Displacements and Potentials: 変位と潜在性

Saturday 8 December 13:30~14:30

Location: Room Q601 – Individual Papers Session 1（日本語）

若者と教育：変位

日本のコミュニティースクール

遠藤希林（南山大学）

今回、私が研究しているのは「日本のコミュニティースクール」である。コミュニティースクールは道徳教育と密接にかかわっており、2020 年度から道徳が教科化される今日の日本において重要な話題である。現在、文部科学省は 2020 年度の新学習指導要領の内容に、開かれた学校を目指すという文言を取り入れている。これは閉鎖的で秘密の花園とも呼ばれている日本の学校の性質を根本から覆そうとしていることが伺える。道徳の教科化（文章による評価、検定教科書、カリキュラムの導入など）に伴いコミュニティースクールはさらに重要視されると考えられる。

研究内容としては、岐阜のコミュニティースクールと三鷹市のコミュニティースクールの特徴を踏まえ、日本のこれからの学校の在り方について考える。今回の AJJ では地方創生と開かれた学校について考えたい。学校に地域の住民や保護者が参入することによって、子どもの居場所づくりに繋がり、安心して学習を行える環境を整えることになる。また、地域の子どもに対する「目」を増やすことで、地域自体が不審者に対しての警戒を重視し、次世代の担い手として子供を育てるという利点がある。

議論内容として、コミュニティースクールの普及への障壁について討論できたらと考えている。2017 年から約一年で日本の公立学校のコミュニティースクールは 1.5 倍に増えたが、まだ全体の 14%にとどまっている。この事実を踏まえ、意見を交流できたらと考える。

貧困と教育格差の連鎖

川村梨華（南山大学）

私は教育格差の連鎖について主にフィリピンを例として研究している。

フィリピンで活動する NGO の方にフィリピンの教育状況について話を聞き、フィリピンのような途上国では貧困が世代を超えて受け継がれ、負の連鎖が生まれており、教育がそれに大きく関与しているのではないかと考えた。NSO が 2000 年の FIES の際に、世帯主の教育レベル別の貧困状況を調査している。その結果、貧困層の世帯主の多くが、初等教育卒業程度の教育レベルにあり、貧困率および貧困の深度は、教育レベルが低くなるにしたがって高まることを明らかにしている。こうした教育レベルと貧困の問題は、親から子へと受け継がれる可能性が高

い。このような問題から教育に焦点をあて、フィリピンは初等教育の普及率が高いにも関わらず、教育格差が未だに縮まらない現状にはどのような問題があるのかを追求する。また、今は先進国である日本がどのように教育改革を遂げてきたのかということについても研究し、フィリピンをはじめとする途上国は今後、どのように今の状況を打破していくべきなのかを日本の教育発展を参考に考えたい。

そこで議題としたいのが、教育格差を少しでもなくすにはどのような方法があるかということである。途上国だけでなく、先進国であっても隠れた教育格差は存在している。そのような格差を埋め、貧困のためにうまれる教育格差の連鎖を止めるためにできることを考えたい。

世代を超えたひきこもり

村上綾音（南山大学）

昨今では、ひきこもりという言葉をよく聞くようになり、日本において大きな問題となっている。ひきこもりといえば「不登校」などの学校関連の要因による若者の問題と捉えがちであるが、「職場になじめなかった』などの就労関連のひきこもりが増えてきている。2010 年の内閣府の調査で、およそ 69 万人のひきこもりがいると推計されたが、この調査では 40 代以上を調査の対象としていないため、実際は 100 万人を超えると予測されている。このようにひきこもりは、今や若者だけの問題でなく、大人世代にも広がってきている重大な問題なのである。この現実がある以上、幅広い世代のひきこもりを問題視していかなくてはいけないと考える。

この発表では、若者と大人のひきこもりがそれぞれなぜ起こり、どのような問題があるのかを見ていく。また、ひきこもりに対する否定的な意見と肯定的な意見の両方を紹介する。ディスカッション・テーマは、若者と大人のひきこもりに対して、どのように対応していくべきかについて話し合いたい。この発表を通じて、ひきこもりは誰にでも起こりうることであり、自分の身にも降りかかる恐れがあることを知って、ひきこもりを身近に感じてほしいと思う。

子どもの孤立 - 社会に居場所を作る-

平下夏帆（南山大学）、神谷陽奈（南山大学）

国連児童基金(UNICEF)が 2007 年に行った OECD 加盟国 25 か国の 15 歳を対象とした意識調査によると、日本人の 29.8%が「自分は孤独だと感じる」と回答している。これは対象の国々の中で圧倒的最下位である。そこで私たちは「日本の子どもの孤立」の問題に着目した。子どもに関する社会問題について論じる時には往々にして「子育ては家庭内の問題で、子どもがいない世帯には関係がない」という指摘がある。しかし私たちは子どもの孤立問題への対策は単なる福祉政策ではなく、日本の将来の担い手に対する投資であり、そこから還元される利益は全国民が享受するものであるとし、社会全体で考えるべき問題として提起する。

孤立問題は様々な社会問題を引き起こす。ここでは貧困と非行について述べる。貧困問題も非行問題も、悪循環によって世代を超えて連鎖していき、支援が行き届きづらいことから、更に孤立を助長してしまうという複雑な問題である。行政も危機感を感じ、支援金や保護制度、支援プロジェクトなどで対策を講じている。しかし樹形図のように広がる孤立問題の一部の枝葉にアプローチしているにすぎず、本当に支援を必要としている人に届いていない現状がある。その中で、行政や教育従事者でなくても、子ども食堂や里親制度などを利用して貢献している人がいる。それらを踏まえて私たち大学生が孤立問題にアプローチするにはどうしたらいいのかということについて考えたい。

安心して学ぶことができる教育環境へ - スクールシューティングから若者を守るためには -
阿部彩乃（南山大学）

2018 年 2 月 14 日、アメリカのフロリダ州ストーンマン・ダグラス高校で銃乱射事件が発生し、17 名の学生及び学校スタッフが犠牲となった。その事件後、被害を受けた若者数名が銃規制強化を求める活動を行った出来事が、新聞やテレビなどのメディアに取り上げられ、日本国内でも話題となった。このように、アメリカにおける銃規制問題は、若者が声を挙げて政府に訴えかけなければならないほど深刻な問題であると捉えることができる。2018 年 11 月 20 日現在、銃暴力対策を掲げる市民団体“Everytown for Gun Safety” の調査によると、2018 年のアメリカの教育環境における銃事件発生件数は 75 件にのぼるという。若い命を失い、涙を流しては、無為に次の被害を待つアメリカではなぜ銃規制が進まないのだろうかと疑問を持った。そこで本日は、アメリカの銃規制の歴史や抱えている問題を紹介し、その後のディスカッションでは、銃を規制して若者を守るのではなく、どのようにして銃と共存しながらも若者の命を守ることができるのか、スクールシューティングの発生を抑制するための事前対策と事後対策について話し合いたいと考える。私たちと同年代の若者が、銃の恐怖に怯えることなく、安心して学ぶことができる教育環境を追求したい。

Saturday 8 December 13:30~14:30

Location: Room Q602 – Individual Papers Session 2（日本語）

多様性：潜在性

ハラールとは何？海外の事例から見る今後の日本の政策
小出清香（南山大学）

訪日観光客が増え続ける中で次に増加が望まれるのがイスラーム圏からの観光客である。もともと宗教という文化に馴染みがない日本は、果たしてイスラーム教徒にとって過ごしやすい、暮らしやすい場所になっているのだろうか。ここでは、イスラーム教の中でも食事の面からイスラーム教徒にとってより暮らしやすい日本に変化していくには、という内容を発表する。

イスラーム教とは：7 世紀にムハンマドが創始した宗教である。聖典である「クルアーン」に基づく信仰、儀礼をもつ。イスラームとは「神に帰依すること」を意味し、その信仰の中心はアッラー、天使、預言者、聖典、最後の審判を信じることである。イスラーム教徒は自らをムスリムと呼ぶ。ムスリムはアッラーの前で等しく平等であるとされ、この平等主義が、イスラーム教が世界宗教となった理由の 1 つであると考えられる。

ハラールとは：イスラーム教の教義で許されているものが「ハラール」であり、反対に許されていないものを「ハラーム」という。食事に関して具体例として挙げられるのが、豚やアルコールを口にしてはいけないということである。

女性オタクの移り変わり
加藤春佳（南山大学）

私は、女性オタクの時代の変遷と彼女たちを取り巻く未来について、鍵となった出来事・事柄、特に SNS の影響の観点から考える。そのために、鍵となった出来事や、その時の文化に沿

って４つの世代に分け、世代ごとの社会との関わり方やその変化を、SNS との関わり方やその発展の視点から比較検証する。

ここでいうオタクとは、アニメ・漫画等の分野を主に活動する「アキバ系」のオタク文化を嗜む人達のことをいう。そのため、アイドル、鉄道などといった分野のオタクは含まない。中でもアニメ・漫画のオタクに着目したのは、近年、アニメ作品に対する日本人の注目度が高く、その中でも、女性オタクを目にする機会が増えたためである。既に研究されている「オタク文化」が男性中心であり、４つの世代に区別し考えられていることから、女性オタクも同様に区別し、比較することにした。男性オタクは 1960 年代生まれを第１世代、そして、10 年刻みで第２世代、第３世代、第４世代と続いている。これらを基礎とし、男性オタクとの比較をしながら女性オタクの特徴を示していきたい。

多文化共生社会実現に向けた小学校教育の見直し

入江菜月（南山大学）、今川あかり（南山大学）

日本で多文化共生社会を実現させるためには、どのような小学校教育が必要かについて述べる。現代の日本はグローバル化が進み外国人の流入が増加しており、今後も少子高齢化による労働者不足の問題などから在留外国人の数は増加すると予想されている。その背景から、文化や言語が異なる外国人と日本という単一民族国家で生きている私たちが同じ国の中で関わり合い、生活し、共存していくためには、多文化共生社会という考え方が必要になってくる。ここで扱う多文化共生社会とは、ある一つの社会を構成する複数の文化が互いに認め尊重しあい、対等な関係を築く社会のことである。ここでは、多民族主義のオーストラリア、複言語教育政策を行うヨーロッパ、なかでもスウェーデンの小学校教育を比較し、具体的な政策、目的から現状を把握する。そこから、国という枠組みを超えてより良い関係を築き、共存していくための手段の一つとして、小学校教育に焦点を当てる。小学校教育は日本及び上記の国々において重要な義務教育として位置づけられており、子供の発達に影響を与える重要な時期であり、国民性や歴史的背景が少なくとも関わっていると考えるからである。これらを踏まえて、どのような小学校教育を日本で進めていけば、多文化共生社会の中で生きていけるのかについて議論する。

多文化共生×外国人労働者

野呂明穂（南山大学）、佐藤理乃（南山大学）

近年、日本では人口が減り続けており、特に若い世代が減り続けている社会である。そのため、消費の鈍化による経済の停滞や労働力人口の減少が生じ、国の活力が失われることになる。そこで、新たな「働き手」の一つとして、外国人労働者が挙げられ、その数は年々増加している。初めに、日本における外国人労働者の現状を述べ、次に、外国人労働者を支える行政の政策や地域の取り組みを取り上げる。ここでは例として、愛知県豊田市を挙げる。豊田市は、トヨタ自動車を主体とし、製造業を基盤とした産業構造を持つ。世界有数の自動車産業の集積地として発展をしてきた。自動車産業は、その途上で国内での生産拡大とともに、海外への製品輸出や全世界からの部品調達、海外拠点での生産、販売等、世界的な拡大を続けてきた。その過程において、自動車産業の関連企業等で働く日系人を始めとする外国人住民が増加し、またビジネスを目的とした海外からの来訪者も増加しており、地域の国際化が進んでいる状況である。そこで、多文化共生が重要視されている現在、日本の行政や地域が取り組むべきことは何かを考察する。そして、「日本人が外国人労働者とより良い社会を築くためには、個人・地域として何が重要であるか」をディスカッションテーマとする。

Saturday 8 December 13:30~14:30

Location: Room Q603 – Panel Session 1 (英語)

Teaching/Learning Anthropology through Fieldwork at Tohoku University

Ichiro NUMAZAKI (Tohoku University)

This panel presents how long-term fieldwork is used as a pedagogical method at the undergraduate level anthropology program at Tohoku University. Most students in our program start conducting individual fieldwork during the third year and continue to carry it out through the fourth year, eventually producing a substantial ethnographic thesis. Each student chooses a particular group or organization, joins in its activities and does participant observations as well as interviews to collect ethnographic data. Our teaching of fieldwork is unique in two regards. First, we ask students to go solo; going into the field alone and doing as holistic a research as they can individually. Second, we ask students to get involved in their field for a substantial amount of time over two academic years. Students will produce a medium length "reports," preliminary ethnographic description of their chosen fields, by the end of their third year. In the subsequent year, they continue their fieldwork and write up a comprehensive ethnography as their graduation theses. Three students, all in their fourth year, will present their field research and discuss what they learned through long-term "solo" fieldwork. They will discuss how they chose their fields, how they conducted their fieldwork, and what kind of analyses they intend to perform in their graduation theses.

An Anthropological Study of "Tsukemono (Pickles)" in Japanese Food Culture

Risa KATSUMATA (Tohoku University)

The purpose of this research is to examine the role of "tsukemono (pickles)" in Japanese food culture and to analyze the present situation of the tsukemono industry. Tsukemono are estimated to have been made first in the Jomon period. The oldest description of tsukemono is found in the Nara era. Since then, it has been one of the basic dishes in Japanese cuisine. In recent years, however, consumption of tsukemono is decreasing as the Japanese people consume less and less rice. I conducted fieldwork at Okada Food Industry Co., Ltd., a tsukemono manufacturing and selling company located in Sendai City. This company was established in 1946. It is trying to do what it can to prevent further decline of the tsukemono industry. I observed the company's daily operation as a volunteer helper. Based on my observations and on interview materials, I will describe the current state of the tsukemono industry. My study shows that the role of tsukemono in Japanese food culture remains basically the same today even though the consumption of rice and tsukemono is decreasing. Both main and side dishes in Japanese cuisine have changed dramatically over the years and they keep changing today, but I predict that tsukemono will be a vital part of Japanese cuisine as long as rice remains a necessary part of it. Finally, I would like to discuss what I learned about anthropology by doing fieldwork at a small manufacturing company.

An Anthropological Study of a "Bankara (Uncouth)" Cheerleading Team

Chihiro GOTO (Tohoku University)

"Bankara Ouendan (Uncouth-style Cheer Leading Team)" is one type of cheer leading team organized at high school or university in Japan. This style of cheer leading originates in the Meiji era, and now it is still maintained by some high school and university cheer leading teams mainly in the Tohoku region and some parts of the Kanto region. Bankara Ouendan looks special and weird. The members wear tattered uniforms, they are either skin-headed or very long-haired, their speech is rough and rude, and they appear too dignified to approach or talk to. They are secretive and always conscious of their role as cheer leaders. Nonetheless, they also live their daily lives as ordinary students do. Very few studies have been done on the history of the Bunkara Ouendan or on its philosophy. To investigate the history and culture of Bankara Ouendan in more detail, I conducted an ethnographic study of the activities of one high school cheer leading team and interviewed its members. I will describe their practice scene, the stories they told me, and the cheer leading scene at a baseball game. I will analyze the ritualistic and formalistic nature of their cheer leading. I will also examine what role they play in school and in society at large. I will conclude that Bankara Oendan is a "community of believers." Finally, I will say a few words on fieldwork as a means of learning anthropological thinking.

The Current State and Issues of "Kosadate Shien" (Child-Rearing Support): An Analysis of the Stories Told by Parents in Sendai

Mai YOSHIKAWA (Tohoku University)

The purpose of my research is to illuminate the current state of child rearing and the problems parents face in Japan in order to understand what kind of child rearing support they need. I did two kinds of fieldwork. First, I conducted intensive interviews with four parents rearing children in Sendai. Three of them are women, and one is a man. The common characteristics they share are: a nuclear family, double income, and the use of a nursery school in daytime. I asked them how they spend a day, what kind of trouble they have, how they feel about children and about child rearing. Second, I worked as a volunteer staff at a child rearing support group in Sendai, which I call Cafe A, and did participation observation from June to November 2017. This cafe was opened in February 2017 to provide a place where people with small children can enter without worry and spend time relaxing. The cafe has a space for kids, and a room for changing diapers or breast feeding. Once a month, the cafe holds a musical performance event that both parents and children can enjoy. I will consider three things in my presentation: first, the characteristics of child rearing parents in Japan now; second, what kind of support Cafe A provides and what meaning the users find in it; and finally, what kind of child rearing support is needed by parents today. I will also discuss doing fieldwork as an undergraduate student.

Saturday 8 December 14:45~15:45

Location: Room Q601 – Individual Papers Session 3（日本語）

若者と教育：潜在性

留学中の寮生活における日本語と英語によるソーシャル・ネットワーキングの形成

梅村拓臣（南山大学）

近年では、日本にやってくる外国人留学生が多くなってきている。さらにその留学生たちは個人でアパートなどを借りるのではなく、大学所有の寮などに住むという形態が増えてきている。寮には「学生への経済的問題の配慮」や「快適な生活環境の提供」といった物理的な役割だけではなく、「共同生活を通じた規律意識の醸成」や「留学生との共同生活を通じた異文化理解・外国語能力の向上」などの教育的な役割も持っている。

今回は後者の教育的な役割が実際に果たされているかに焦点を当てる。具体的には留学生が目標言語を学ぶのに最も有効な学習体験は何か、どんな場所で起きているのか、誰との会話やコミュニケーションなのか、などである。これらのことを南山大学の国際寮に住む総合政策学部の留学生が 1 週間の記録をしたアンケートをもとに議論していこうと思う。

若者の恋愛実態 - 若者は本当に「恋愛離れ」しているのか？-

岩本萌（南山大学）

近年、ニュースの特集などでしばしば取り上げられているのが、「若者の〇〇離れ」であり、〇〇には、「車」や「新聞」、「お酒」等が入る。その中でも、社会的に問題となっているのが、「恋愛」である。恋愛に対して消極的な男性を意味する「草食系男子」や「絶食系男子」などの言葉が誕生し、「最近の若者は…」とある種バッシングのような発言をするテレビのコメンテーターもいる。しかし、本当に若者は恋愛をしていないのだろうか。国立社会保障・人口問題研究所の調査では「恋人ナシ」の割合は男で 61.4%、女で 49.5%という近年最高の数値が報告されている。メディアはそのデータを取り沙汰し、「若者の恋愛離れ」が進んでいて、最終的には社会問題である少子化の元凶となっているとまでいう。一見数字だけを見れば、若者は恋愛離れをしているように受け取れるが、実態は本当にそうであるのか？恋愛至上主義であったバブル期を経験した大人が、その一部分・表面だけを取り沙汰しているのではないかと私は考える。今回、若者の恋愛実態について調査し、メディアがいう通り、若者は本当に恋愛離れしているのか、少子化の元凶になっているのかを明らかにしていく。そして後のディスカッションでは、「結婚しなくても幸せになれるこの時代」において、変化してきている恋愛や結婚に対する価値観について議論していきたい。

日本の奨学金制度

柴田比呂（南山大学）、鈴木大雅（南山大学）

現在日本の若者の半数以上が大学に進学し、大学生の約 50%が奨学金制度などの援助を受けています。奨学金は学生の大学生活を援助するものだと考えられていますが果たしてそうでしょうか。現在問題となっているのは奨学金返済における滞納者の増加です。奨学金の返済ができない人は現在約 33 万人います。学生支援を目的としているはずの奨学金が受給者に対して具

体的にどのような影響を及ぼすか、また滞納者に対する政府の対応がいかなるものかについて追究していきます。さらに比較対象としてアメリカの奨学金制度について取り上げました。現在アメリカにおける大学進学率は日本と同じくらいで、彼らの約 70%が奨学金制度などの援助を受けています。日本とアメリカの奨学金制度においてどのような違いがあるか、なぜ日本と比べてアメリカの奨学金受給者の割合が高いのかについても言及していきたいと思います。

発表の流れは、まず日本の奨学金制度とアメリカの奨学金制度をそれぞれ説明します。これら二つの国を比較しながら各国の特徴をつかみます。そしてこの比較から示された日本の奨学金制度の問題点を述べ、それに対する改善策について皆さんで議論したいと考えています。

日本と外国の卒業後の進路の違い

仲野駿（南山大学）、Rienjaroensuk Veerin（南山大学）、
Sangmukda Poonavich（南山大学）、仲村冬馬（南山大学）

日本では大学卒業後に就職することが当たり前となっている。厚生労働省のデータによると、2018 年の日本の大学生就職率は 98%に達する。それに対して、外国、特に欧米諸国では卒業後の進路は多様である。例として、ハーバード大学ビジネスレビューによるとアメリカの大学生就職率は 35%に過ぎない。海外には就職の他にギャップイヤーや進学、起業をするなどの選択肢が存在しているなかで、なぜ日本ではほぼ全ての大学生が就職するのか。日本における雇用慣行がその要因ではないかと考えている。新卒一括採用が浸透している日本では、大学生に就職以外の選択肢が与えられていない。もう一つの要因は日本人と外国人の思考の違いにあると思われる。集団主義が主流である日本では、他の進路を選択することは非常に困難であろう。本発表ではアンケートを通して、日本人と外国人の卒業後の進路の実態を把握した上で、その差が生まれる要因について考える。その後、日本に特有な雇用慣行と集団主義の二つの仮説を中心に詳しく要因を探りたい。最終的に日本のこの現状をどのように改善すべきかを考えていきたい。

Saturday 8 December 14:45~15:45

Location: Room Q602 – Individual Papers Session 4（日本語）

コミュニケーション：潜在性

ビジュアルコミュニケーションが若者に及ぼす影響

山田佳奈子（南山大学）

スマホの普及に伴い、誰もが気軽に写真や動画を撮るようになり、SNS 利用者は劇的に増加した。この変化は私たちの情報行動、ライフスタイル、価値観までも一変させてしまった。そして、SNS 上のコミュニケーションにも変化が見られる。みなさんは「ビジュアルコミュニケーション」という言葉を知っているだろうか。これは、スマホのアプリを通じた「写真や動画による意思疎通のやりとり」という意味である。従来の SNS による写真の投稿は特別なイベントの記録といった意味合いが多かったが、最近、特にインスタグラムでは日常をそのまま切り取って投稿するといった、日々の状況を共有するようなものとなっており、写真や動画は日常の情報や感情を共有するといったコミュニケーションの道具となっている。ブログや Twitter のような文字によるコミュニケーションから、インスタグラムでの写真を共有するビジュアルコミュニケーションへと移行しつつある。現代の若者の多くがインスタグラムを利用しているが、

彼らの中には「写真映えする思い出を作りたい」と思っている人が多い。なぜこんなにも若者は写真映えにこだわるのだろうか。ここまで若者を夢中にさせるインスタグラムの実態はなんだろうか。これらについてみなさんと議論していきたいと考える。

言葉の壁の解決策、言語不要のコミュニケーションの可能性

川添聖也（南山大学）

「言葉の壁」。それは言語の違いによって生じるコミュニケーションの障害である。特にグローバル社会となり多くの国の人々と関わる機会が増えた現代では、相手の言葉が理解できない、自分の意思を思うように伝えられないといった言語の違いによるコミュニケーションの障害はより大きな問題となってしまっている。日本国内でも実際に多くの人々が外国の言語を学び、義務教育でも英語という科目の履修が義務付けられている事実から見てもこの問題は無視できないものであるということが言えるであろう。今回の発表では、この問題の改善のために発表者がある一つの提案を行い、それについての簡単な議論を行いたいと思う。

絵画の復興及び精神的豊かさの繁栄を目指して

中根佑衣（南山大学）

芸術とは、一定の材料・技術・身体などを駆使して、鑑賞的価値を創造する人間の活動およびその所産である。その中でも絵画は社会生活を反映し、時に社会に対するメッセージとしての役割を果たしてきた。しかしながら現代社会では芸術に触れ、その空気感や人間のこみ上げる感情を表現する機会が減少してしまった。内閣府の調査では、10 年で芸術鑑賞をする人が3.6%減少したというデータがあり、現代人の芸術離れが見られる。

そこで私は芸術の復興により人間の心の豊かさを回復させることを目的として、この研究を行った。研究では芸術の中でも絵画を取り上げている。絵画は視覚という私たちの最も鋭い感覚から鑑賞できる作品として、長い年月を超えて私たちに想像力を働かせてきた。絵画はその時の情勢や文化を表現するのみならず、「社会に対して影響を与えてきた」と絵画評論家の権威であるフランカステルは述べている。そこで、美術史、自然主義や写実主義などの表現技法、対象となる題材を通してどのように絵画が社会に影響を与えてきたのかを探求する。

ディスカッションでは、若者が芸術鑑賞に対してどのような印象をもち、芸術がどのように実生活に影響を与え、精神的な豊かさを育ててきたのかを議論したいと考えている。

スポーツ界におけるパワーハラスメント・体罰の問題点と解決策

大堀翼（南山大学）

2007 年 6 月 26 日、相撲の時津風部屋に新弟子として入門した当時 17 歳の少年が、稽古中に心肺停止の状態となり、病院に搬送されたが約 1 時間後に死亡した事件があった。自分と同じ十代の少年が、事件や事故などではなくスポーツの練習で命を落としたという衝撃的なニュースに当時の私は激しい衝撃を受けたのを今でもよく覚えている。これは過去におきた、ただの悲しい事件のひとつではない。なぜならこの事件は練習中の事故などではなく親方や兄弟子などによっておこなわれた「パワハラ」によっておきてしまったことだからだ。現在でもレスリング、アメリカンフットボール、体操、ボクシングなど、スポーツ界におけるパワーハラスメントや体罰がメディアに取り上げられ、大きな問題になっている。今回は、このパワハラという問題がどうして発生してしまうのか。自らの考察をもとに議論を行っていきたいと思う。

Saturday 8 December 14:45~15:45

Location: Room Q603 – Individual Papers Session 5 (英語)

Social Support: Potentials

Education of Children with Special Needs in Regular Classes in Japan

Maki URATA (Nanzan University)

Education of children with special needs is aimed at imparting skills to overcome difficulties which children encounter in their lives and hastening their social participation. Japan introduced "Special Needs Education," which considers the educational needs of each student, and yet children with special needs do not receive a fair education, especially when they are in regular classes. According to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 6.5 percent of students in regular classes require special needs education, whereas teachers working at regular schools still lack training in educating disabled children. In this presentation, I will examine the reasons why some students with special needs go to regular classes, mention what kinds of problems parents/students face in regular classes, and suggest solutions which can be applied by teachers in regular classes.

Current State of Elderly Care in Japan: Key Perspectives, Shortfalls and Future Implications

Takanari MORIYAMA (Doshisha University)

In recent years, the rapidly aging and declining society in Japan, more specifically its super aging society, has been put both in the domestic and international spotlight. While much of the conversation has focused on the phenomenon itself, the elderly care industry has been largely overlooked. As the number of elderly increases, the proportion of seniors dependent on others— such as on the government for its services like the pension and healthcare system as well as being reliant on the industry for assistance to do everyday chores— will rise accordingly. As a result, the healthcare industry is and will continue to be pushed to its limit. What is concerning is the expected rising costs of elderly care and the growing uncertainty over governmental funding as revenue sources are projected to shrink. Therefore, as the healthcare industry is pushed to its limit, elderly patients will increasingly be unable to receive the proper care that they need. Besides this, there is also another pressing matter— an increasing shortage of caregivers. How will the healthcare industry fill the increasing need of workers? While training and hiring foreign workers as well as the implementation of various robots are being gradually introduced, other viable solutions to the problem are increasingly needed. Because Japan is the nation in the world most facing such troubling population shifts and increasing problems with its healthcare industry, the country can potentially set an excellent precedent on how the industry should be structured, organized and run.

The Erosion of Human Rights in the Defensive Acts of Counter Terrorism

Haruka URUNO (Doshisha University)

The growing threat of terrorism has inflicted fear among the international community. Awareness towards terrorism as a threat to the globe began with the War on Terror proclaimed by the United

States in the aftermath of the September 11th attacks on the World Trade Center in 2001. Since then, strategies to combat terrorism have become increasingly diverse and intensified for the purpose of reinforcing national and regional security. Strategies to combat terrorism have long been debated and tactics that involve violence are not the only options available. A growing number of people have become dubious of non-violent forms of counter terrorism strategies, for these measures involve access to private information and supervision of citizen behavior that may pose a violation of human rights. This debate reveals the complexity of policy making and the attempt for states to challenge terrorism from various dimensions in the name of surveillance, while also seeking their own interests through controlling citizen behavior. Through a comparative analysis of counter terrorism strategies in the United States, European Union, and Japan, this research seeks to find an answer to the question: in the defensive strategies of counter terrorism, what factors weaken civil/human rights?

Saturday 8 December 14:45~15:45

Location: Room Q604 – Individual Papers Session 6 (英語)

Gender: Potentials

Balancing Masculinities and Femininities: Strategies Used by Gay Men in Japan

Yuichi YAMAZAKI (Soka University)

As marginalized forms of masculinity, examining how gay men account for their gender is important for the analysis of masculinities as a whole. Drawing on a Japan-based sample of seven men who identified as gay, this thesis explores the participants' dilemma of producing their identities as masculine within a cultural milieu which constructs homosexuality as the antithesis of masculinity. I qualitatively analyzed interviews, and participants reported a range of responses to traditional masculinity ideologies, most of which centered on balancing presentations of masculine and feminine characteristics. Negotiation strategies served a variety of functions, including avoiding anti-gay violence, living up to expected images of masculinity, and creating unique images of person-hood free of gender role expectations. These data suggest a complex picture of gay men's management of masculinity expectations and how 'regular' masculinity was claimed through resisting essentialist notions of gay male effeminacy and 'othering' effeminacy by distancing themselves from other 'camp' gay men. I conclude by suggesting a greater emphasis should be placed on gay men as gendered beings, and how gay men resist and are complicit in their own marginalization.

Social Norms and the Barriers to Gender Equality:
A Case Study Among Female Brazilian Nikkeiji Working in Japan

Mariana KAMI MURA (Doshisha University)

In contemporary Japan, social inequalities still persist, leading to several long-term socio-economic consequences. At the same time, the number of foreigners in Japan has been rapidly increasing and projections point to a continuation of this trend. The entry of foreign labor in Japan

is responsible for more socio-economic disparities and cultural integration is a serious obstacle for many immigrants living in Japan. This study attempts to convey that discrimination and prejudice is still predominant in the Japanese workforce. How is it to be a foreign female worker in Japan? The field of gender studies has challenged diverse topics involving women's labor abroad. Through conducting a survey, this study uses a qualitative research approach, focusing on different perspectives of Brazilian "nikkeijin" women residing in Shiga-ken. It will attempt to portray more specific and tangible work-related experiences of nikkeijin women (blue-collar workers) in the Japanese workforce. The perception of gender inequality is influenced by cultural and social norms, yet "ethnicity" plays a massive role when defining social mobility in the social circle. Cultural differences that emerge from such classifications aggravate gender inequality in the workplace.

Saturday 8 December 16:00~17:00

Location: Room Q601 – Individual Papers Session 7（日本語）

名古屋の生活：潜在性

名古屋の魅力 - 衣食住問題から

丸山桃慧（南山大学）

名古屋が「魅力ない街 1 位」に甘んじた要因とは何だろうか。2016 年に実施した「都市ブランド・イメージ調査」において、「最も魅力的に感じる都市」最下位。その逆の「最も魅力に欠けている都市」最上位。このように名古屋が不名誉な結果に終わったことから、話題となっている。しかし本当に名古屋は魅力のない街か、愛着心の強い名古屋の人にとってこれらの結果がどう映っているのか調べた。また、名古屋の文化に着目し、衣食住の観点から魅力を見出そうと考え、名古屋の服装に対する問題や、本来の名古屋めしとは何か、住みやすいと言われる名古屋の街について次のように調べた。 1 つ目に、名古屋がダサいやケバい、派手と言われる要因と考えられる名古屋嬢についてみると、名古屋の性格性を発見した。2 つ目に、名古屋めしの歴史や、名古屋めしがなぜ赤褐色のものばかりなのか、ご当地グルメの魅力について調べた。3 つ目に、名古屋の人がよそに出たがらないことや、名古屋の住みやすさについて調べた。これらの観点から、名古屋の現状について理解し、今後の名古屋の発展につながる政策を提言する。魅力のある街を目指して、名古屋が胸を張って日本三大都市と言えるよう、希望を与えたい。

コーヒーと喫茶店の歴史、愛知県と岐阜県における喫茶店の社会的機能

千藤愛弓（南山大学）

コンビニコーヒーの普及、スターバックスコーヒーの人気、サードウェーブコーヒーと言われる兆候など、現代社会の変化とともにコーヒー文化やそれに伴う喫茶店文化は変容を遂げている。人類とコーヒーとの関わり、コーヒーや喫茶店の歴史や文化について述べた後、モーニングサービス文化の発展と、それに関する社会性や文化について考察していきたい。

約 6 世紀ごろ、エチオピアのカルディというヤギ飼いの若者が、ヤギを追ううちに偶然コーヒーの実を見つけて食べたのが、コーヒーの発見であるといわれる（カルディ伝説）。その後、コーヒーは 13 世紀末ごろにイスラム圏に秘薬として伝わり、15 世紀には嗜好品として普及。次第に欧州でカフェやコーヒーハウス等にて広まっていった。17 世紀のヨーロッパでは、コーヒー

ハウスは科学者やビジネスマンの情報交換の場として発展した。
名古屋地区は、喫茶文化が発達している地区だと言える。一世帯当たりの喫茶にかける支出が突出しているのは名古屋市と隣県の岐阜市であり、これは、車社会であるために飲酒より喫茶にお金を使うことや、古くは尾張藩の第 7 代藩主の徳川宗治の影響があると言われる。
そこで今回は、日本の喫茶店における社会的機能とはなにかについてと、愛知県と岐阜県でモーニングが発達した理由について議論したい。

日本の動物愛護精神

米本有沙（南山大学）

私は日本での動物愛護精神に注目し、今後日本が動物との関わり方において改善していかなければいけない点について研究している。現在、日本では犬・猫の飼育数が 1844 万 6 千頭にのぼる。2009 年を境に犬・猫の飼育数は減少してきているものの、まだ多くの人が犬・猫と共に生活している。しかしその一方で 2004 年を境に減少してきてはいるが、犬・猫の殺処分数は 55998 頭と多くの犬・猫が殺されてしまっている現状がある。「引っ越さなければいけないから」、「可愛くなくなったから」などという身勝手な理由で動物を手放す人がおり、近年では多頭飼いによりペットの世話を見切れなくなってしまい飼育崩壊が起きていることも度々ニュースで見るようになってきている。ペットビジネスの中にも動物に対する様々な闇が存在している。日本の動物愛護精神は世界的に見ればまだ低いものであり、多くの動物に影響を与え、傷つけているのが現状である。そこで動物愛護先進国と言われている、ドイツ、スウェーデン、イギリスでの動物に対する意識や取組みについて調査し、日本と比較していく。その中で、日本の動物愛護精神が低い原因や高めていくための方法、改善していかなければいけない点について考えていく。この研究を踏まえて、日本の動物愛護精神についての問題点と改善点について討論していきたい。

人間と動物、特に家庭動物との関係性

澁澤沙月（南山大学）

1980 年代後半に日本に訪れたいわゆる「ペットブーム」。この時期はバブル景気と重なり、収入が増え豊かな生活を謳歌する人々の間で、犬や猫を「手に入れる」ことに価値を見出すことが定着していった。内閣府の調査によると家庭で犬や猫などのペットを飼っている人の割合は 34.4%となっていることが明らかになっている。また、今の日本では 15 歳未満の子供がいる家庭よりもペットを飼育している家庭の方が多いという現状にあり、子供のいない家庭においてペットは子供の役割を果たし、「家族・パートナー」という存在になっているのではないかと考えられる。そこでは、動物を飼うことで私たち人間にどのようなメリットが生じているのだろうか。例えば、動物を飼うことでストレス軽減に繋がっている等の「人間への身体的効果」、動物がそばにいることで病気の治療に期待されると考えられる「動物介在療法」、そして特に「家庭動物と子どもの関係性」について研究している。
そこで、特にペットを飼育し子供のいる家庭において、動物の存在に何を期待しているのか、更には子供の成長にどのような影響を及ぼしていると考えられるのか討論していきたい。また、海外のペット事情と比較しながら、少子高齢化にある日本において今後のペット事情にどのように影響していくのかについても考えていきたい。

Saturday 8 December 16:00~17:00

Location: Room Q602 – Individual Papers Session 8（日本語）

ジェンダー：変位と潜在性

専業主婦、兼業主婦という選択

岡田悠香（南山大学）

現代において、女性の働き方は多種多様になった。以前までは、女性が外へ働きに出ることが主流ではなかったが、今となっては不思議なことではない。一方、結婚後の家庭のあり方として、女性が主婦として生活することはまだまだ主流であるのが日本の現状である。つまり、女性は結婚・出産後、専業主婦として過ごしていくのか、仕事と家事を並行して行う兼業主婦として過ごしていくのかの選択を迫られるのである。

本論は女性が結婚・出産を経て選択に迫られた時に助けとなる一基準を作成するために書かれたものである。主婦としてのストレス、主婦別の家計、主婦別の子供に与える影響という 3 つの観点から、専業主婦と兼業主婦の現状や実態を比較しながら示す。

ランドセルの多色化現象から見る「同調性」の変容

松岡衛伸（南山大学）

ランドセルは男児が黒色で、女児は赤色が定番色とされてきた。しかし、ここ約 20 年間にランドセルの「色」に関して大きな変化が起きている。一般社団法人ランドセル工業会が 2018 年 4 月に小学校へ入学する子供の親を対象に行ったアンケートによると、男児のうち黒色を購入した子供の割合は 67%、女児のうち赤色を購入した子供の割合は 20.6%となっている。男女差が見られるものの定番色の割合は減少し、また、女児の方により顕著に色の多様化が確認できる。そこで、以前から自由に色が選択可能であったはずのランドセルの多色化が現代社会の特質を表しているのではないかと考え、この現象を取り上げる。

多色化現象の要因としてランドセルの選択権が親から子へと移行していることが挙げられる。元来、幼少の頃は子供の経済は親の経済によってつつまれ、親が与えたものには子供に選択の余地はなかった。しかし、現状、子供は経済力を持たずして消費者として選択を行っていることになる。つまり、ランドセルの多色化現象は子供の個性を反映した結果と言える。

そこで、現代の子供はランドセルの色をどのように決めているのか、そして、それが男女間で差異があるのではないかということについて議論したいと考えている。

性の多様性とインターセックス

白木日菜（南山大学）、安齋亜希子（南山大学）

近年、多種多様な性の見方が注目されている。体の性と性自認が一致しないトランスジェンダーはよく知られてきているが、本当に体の性と性自認は男性と女性の二つにしか分けられないのだろうか。実は性はもっと多様なものということが、英語版 facebook の性の選択欄や映画『性別が、ない！』からも見て分かる。私たちはその中で、男性でも女性でもない「中性＝インターセックス」という人たちを知り、未だに認知度の低い「インターセックス」という性別である人々について焦点を当てて調べてみたいと思った。

インターセックスとは体の性が男女どちらかはっきりしない性別のことであり、2000 人に 1 人の割合で存在している。その決定的な定義はなく、外性器・内性器・内分泌系・性染色体などが男女の二つに分類されないものとされている。冒頭に述べた『性別が、ない!』という映画

はインターセックスである主人公の日常を描いたドキュメンタリー映画であり、主人公以外にも多様な性を持つ人々が登場し、各々の生き方が描かれている。また、スポーツとインターセックスという面で、インターセックスである選手が実際に直面したスポーツにおける壁についても紹介していきたい。

現在、インターセックスとして産まれた子供たちの多くは親によって子供の同意なしに手術が施されている。これをどう捉えるか、手術を受けるべきなのかを今回の議題として取り上げたい。

スカートがジェンダーレスをゆらす

梶浦みるは（南山大学）、太田伊万里（南山大学）、野倉碧莉（南山大学）

私たちはファッションの視点から男らしさ、女らしさを考えることにしました。

なぜ女の人はスカートもズボンも履くのに、男の人はスカートを履かないのか、というところに私たちは疑問を持ちました。世の中は無意識のうちに男らしい、女らしいで分けて考えられている事象がいくつかあります。その分ける行為の中でもっとも視覚的にわかりやすいファッションの視点からジェンダーについて考えていきます。

調べてみると、かつて女の人はスカートを履くものとみなされてきました。しかし時代の変化とともに動きやすさ、仕事のしやすさの面などからズボンも取り入れるようになり服装が多様化しました。一方で男性はというとどうでしょうか。なぜ街の中でスカートをはいている男性をあまり見かけないのでしょうか。のべ250人にアンケートを取り、そこから考察してわかることをまとめました。

ディスカッション：ファッションがジェンダーレス化することに賛成か反対か、またその時にどのような問題が起きるか。

恋愛関係における男性差別

竹内裕菜（南山大学）、新海志織（南山大学）、鈴木麻友（南山大学）

女性の社会進出が進み、女性差別撤廃の動きが活発化する現代では、「男らしさ」「女らしさ」という概念が薄れてきている。しかしながら、「異性同士の恋愛関係」の中ではいまだにその概念が有効であるのではないかと考えた。また、女性差別は取り上げられる一方であまり取り上げられない男性も差別を受けているのではないかと考えたため、男性に求められる「男らしさ」に焦点を当てて考察を行った。この考察を行うために大学生（n=85）を対象にアンケートを行い、その結果として「男がリードすべき」といったような社会的風潮が根強く残っており、この社会的風潮の観点で男性は現在も「男らしさ」を求められているということが明らかとなった。一方の女性が求める男性像は、現代では「その人自身がどんな人か」が重要視され、「男らしさ」は重要視されなくなってきている。以上から、男性像という観点での「男らしさ」は強要されなくなってきたが、社会的風潮による押しつけはいまだに残っていることが分かった。私たちは、女性が求める男性像は今後どのように変化すると思うか、なぜ男性差別は問題視されにくいか、という二点について議論したいと考えている。

Saturday 8 December 16:00~17:00

Location: Room Q603 – Individual Papers Session 9

Discovering Traditions: Potentials

Cultural Anthropological Research on "Tachiai" of Sumo Wrestling

Kei MATSUYAMA (Tsukuba University) (英語)

This presentation is based on the case study of "tachiai (立ち合い)" in professional Japanese sumo wrestling. "Tachiai" is a rule that at the beginning of the bout the two sumo wrestlers face each other and then put their hands down on the ground at the same time to represent the actual start of the bout. In the world of sumo, "70% of victories and defeats are decided by tachiai," while tachiai is realized by "matching of breathing (阿吽の呼吸 a-un no kokyū)" with the opponent. In other words, it seems that the concept of antinomy which is sympathy/competition lives together in the rule of tachiai.

In this presentation, first I will explain the development of regulations surrounding tachiai and connect them to the discussion of modernization. While referring to Bruno Latour's modern ages theory, I explore the entity of sumo. Hybrids that cannot be distinguished like "rules/customs" or "subject/object" are found there.

Finally, my analyses of tachiai in sumo shows that the practice of sumo wrestlers cannot be reduced to a dualism of sympathy/competition. Therefore, this presentation discusses the practice from the perspective of sumo wrestlers and study of modern dualism.

"Spirituality" in Religious Practices of Modern Japan: An Ethnography of Fukushima

Archna SHARMA (Tsukuba University) (日本語)

This paper focuses on spirituality in Tsukuba (Hitokotonushi Shrine) during modern Japan. Several anthropological research studies based on time space, race, caste, immigration and life course of people have been conducted on cities. This research pertains to the field of religious and cultural anthropology. The objective of this paper is to locate spirituality within modern religious practices. What is the importance of religious practices in the life of practitioners? Now, if we ask a Japanese youngster or a middle-aged person which religion they follow or what is your religio, most of the time the answer is, "I do not follow any particular religion." However, these same people go to visit shrines at New Year (Hatsumode), which is a Shinto belief. They marry in churches, and most of the time their funerals are conducted according to Buddhist rituals. In this case, if we cannot call the Japanese religious, can we call them spiritual? How will we differentiate religious practices and spirituality in modern Japan? There are many concepts of spirituality. This paper will explore what kinds of spiritual practices are practised in Tsukuba and how these are related to the substance of spirituality.

Saturday 8 December 16:00~17:00

Location: Room Q604 – Individual Papers Session 10

Culture: Potentials, Displacements (英語)

Cultural Anthropological Research on "Tachiai" of Sumo Wrestling

Wakana SHIRAISHI (Nanzan University)

Recently, the number of foreign tourists visiting Japan has increased. Why do foreign tourists travel in Japan? What do they expect from Japan?

The Japan Tourism Agency has found that foreigners visiting Japan mostly expect to eat Japanese food, so one way to increase the number of foreign tourists visiting Japan might be by improving interest in Japanese food and food tourism. Food tourism refers to travel for the purpose of enjoying the local food and food culture. Research into food culture is important because it will clarify whether foreign tourists can be attracted through food tourism in Japan. This research can help build a food tourism industry that attracts an increasing number of foreign tourists to Japan.

Meaning and Functionality in the Imaginary: Interpreting Reflections of Reality in Japanese Folktales

Nadia SANCHEZ SANDOVAL (Doshisha University)

The narrative forms known as folktales have successfully legitimized the past of numerous societies, using a characteristic combination of imaginary and realistic elements to depict the social reality of individuals. Likewise, diverse Japanese folktales have been able to restate their relevance not just as representative elements of Japanese culture, but also as narratives capable of modifying through generations the values, practices and customs of individuals, creating as a result a tangible renewal of social consciousness, ritualistic behavior and attitudes of Japanese society. Through a comparative analysis of folktales belonging to three specific points in Japanese history, complemented by an examination of social, political and economic conditions permeating the social environments where these narratives were created and shared, it is possible to discover that their elements contain essential meanings and functions that have influenced greatly the past views and practices of individuals, creating as well a lasting impact in current forms of social thought, behavior and popular expression.

Musicking in the Czech Republic: Identity Building through Music in a Multicultural Society

Malika KINOSHITA (Doshisha University)

Various types of culture are always surrounding our lives, and one of them includes the making of sound and listening to sound: music. However according to Christian Small, music is not just about producing and consuming sound, but also an activity itself (Small 1998). In other words, there is significant meaning in the process of making music, not just in the final presentation itself. The process of musicking often includes considerable human interaction and sharing of the same culture, symbols that represent a group's identity.

With this in mind, this paper hopes to investigate how music can affect group and individual identity, especially in connection to the nation. To look at this question, I will focus on the Czech Republic and the case of the Czech National Revival (České národní obrození). The Czech Republic, being located in the heart of Europe, experienced long years of oppression from other nations, and Czech culture was also influenced through this history. To understand how culture holds strong meanings in helping to bring the citizens of a nation together, building a national identity, I explore the history of the Czech Republic from the perspective of music and people.

This is the end of the Student Forum abstracts.